

高校生ビデオ「ふくしの学びと仕事」制作

高校生が、社会福祉の学びや将来の職業を考えようと日本福祉大学や卒業生の働いている社会福祉協議会、保育園などを訪問してインタビューをするビデオの撮影に取り組み、2009年8月母校に配布した。

1. 活動目的

①目的

教職課程を目指す学生の将来は、中学生や高校生の前に立ち、関わっていくことになる。どのように高校生と関わっていけばよいのかを学んでいくことを目的とした。

②この企画の趣旨

2009年5月中旬から7月中旬にかけて、日本福祉大学付属高校生の3年生有志によるビデオ制作が行われた。テーマは「ふくしの学びと仕事」である。高校3年生の彼らが社会福祉協議会や保育所への訪問や日本福祉大学を訪問してお話を伺い、ふくしへの学びを深め、ふくしへの仕事を知っていく中で進路選択にも結びつけていくことが狙いであった。そして、その学んでいる姿を私たち大学生がビデオで撮影し、その様子をプロのカメラマンが撮影するというのがこの企画である。

2. 活動前の準備

①私たちの役割

高校生に直接演技指導をしたり、台本を書いたりということをするのではなく、プロの撮影スタッフ、高校大学の先生たちと高校生とのパイプ役になって、カメラを前に緊張している高校生を落ち着かせることやアドリブ部分の台詞を一緒になって考えること、撮影場所の環境整備などを行った。

②高校生との関わりの中での Reflection

高校生と関わっていくうちに分かってきたことは、彼らが「福祉とは何か」を捉えきれていないことである。では、大学生側には分かっているのかと言われればそうでもない。しかし、個々人それぞれが漠然とした「何か」を捉えている。高校生たちには先ず「ふくしの幅広さ」を伝えることから始まった。「高齢者福祉」や「児童福祉」、「障害者福祉」だけでなく、「司法福祉」や「福祉教育」などもあるのだということに関わりの中で伝えていった。

3. 活動報告

①第一回の撮影：5月22日（金）

撮影の関係上、オープニングとエンディングがこの日に撮影された。撮影前、高校生と大学生が顔を合わせ、話し合いをした。内容は、将来の夢やテストの出来具合、アドリブのセリフなどである。本来ならば、アドリブのセリフはこの日までにある程度決めてくるはずだったが、何も決めていないということだったので緊急に話し合った。

「ふくし」について、私たちが知っていることを分かりやすいように説明した。実際に撮影に入ると、高校生たちはとても上手くビデオの前で話し合いをしていた。私達から

聞いた話を加えながら、自分たちの言葉で話していた。もちろん、演出家の方から、高校生に対して話の内容は勿論のこと、視線や、表情にまで細かい要求が出された。しかし、高校生たちはそれを吸収し、より一層上手くなっていった。この日は、オープニングとエンディングの撮影で終わった。

②第2回目以降の撮影

放課後や休日を利用して社会福祉協議会や保育所などを訪問し、ビデオ撮影を行った。

③撮影終了後の関わり

ビデオの撮影が終わるとプロの撮影スタッフによる編集作業が始まった。編集作業は名古屋のスタジオで行われていたのだが編集作業に立ち会うことが出来た。



僅か17分足らずのビデオを作るのに大勢のスタッフが集まって徹夜で編集作業をしている姿を見て、ものづくりの大変さを知った。完成間近の映像を少しだけ見せていただいたが、現場のモニターから覗いていたものとはまた違った景色がそこにはあり、スタッフの技術と高校生たちの演技が凝縮された作品になっていた。

4. 活動後の Reflection

活動前には緊張感の薄い高校生に危機感を覚えていた。しかし、撮影が始まると、全く違った姿がそこにはあった。誰に促されるわけでもなく次々に言葉が飛び出し、自然の笑顔を持って、インタビューの様子を想像して言葉にしていた。人は一日の間にいや、数時間でこれほどまでに成長するものなのかと驚いた。実はそうではなく、もともと彼らには能力があり、撮影当初は、その能力が緊張によって上手く出せなかっただけなのかもしれない。私たちが気付いていなかっただけで、高校生たちは緊張していたのかもしれない。そのことに気付けなかった私たちは、まだまだ高校生たちとの関わりが上手く出来ていなかったのかもしれないと思い知らされた。しかし、私たちは、高校生のスポンジのような吸収力を目の当たりにし、成長していく姿をビデオに収めることができたことは貴重な経験であったと思う。

5. 今回の活動によってどのような力が身についたか

私たち大学生と高校生たちの年齢の差は2~3歳ほどである。しかし、この年齢の差がお互いの距離感やコミュニケーションをとることを大変難しくする。「どのように話そう」、「話しかけていいのか」などの様々な不安を抱えていた。もちろん、それは高校生たちも同様であったであろう。しかし、そういった不安を持ちながらも少しずつ会話をしていく中で、笑い合うことができるようになっていったと思う。今後、私たちが「教師」という職に就いた時、今回以上に大きな世代間の差がある。しかし、まずは話をしてみることで、その差を埋めていくことができることを学んだ。

また、今回の撮影ではプロのカメラマンや演出家の方々との関わりもあった。彼らも高校生に指導を行うという意味で「教師」といえる。カメラマンや演出家の方々の中には「こ

んな画にしたい」という思いがあっただろう。しかし、あえて高校生の言葉で表現していくことにこだわっていた。「教師」とは、自分にある知識を伝えるだけでなく、その人の中にある思いをその人自身で表現できるようにすることだと、私たちはこの企画を通して学んだと思う。